

太陽光発電に希望

「じ、よん、さん、に、い、に、で、き、な、い、」。そう強く感じ、ついた！」

昨年十二月四日、私立陵ヶ岡保育園（山科区）で行われた太陽光発電装置の点灯式。真っ暗な部屋で園児や保護者、地元住民ら約百人がじつと息を潜めて見守る中、園児二人がスイッチを入れると、クリスマス飾りの光がともり、子どもたちの瞳がぱっと輝いた。

太陽光発電の普及に取り組むNPO「きょうとグリーンファンド」（下京区）が中心となって設置した六号機。費用は約560万円。約半分は新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）から補助を受け、残りは市民らが省エネ、節電した程度を寄付して積み立てた「おひさま基金」などで賄った。

同ファンド副理事長の竜池妃都美(49)は「あの日」が忘れられない。一九八六年四月のチェルノブイリ原発事故。「もし、福井で起きていたら」。育児中の竜池は脅威を感じ、脱原発の市民団体に参加。九七年のCOP3では、会議を深夜まで傍聴、市民イベントで自然エネルギーへの転換を訴えた。

だが、国は自然エネルギーの重要性は認めても原発維持の方針は変えず、「国はあて

にできない」。そう強く感じた。九九年二月、北海道グリーンファンドの講演で基金を集める仕組みを知り、「これだ。市民の力で絶対やろう」。

勉強会には、口コミで続々と仲間が集まってきた。COP3で活躍した市民団体「気候フォーラム」や「環境市民」など、顔見知りのメンバーばかりだった。

二〇〇〇年十二月、こうして十四人の理事からなるファンドが京都に誕生した。

きょうとグリーンファンド

関電京都支店によると、府内の太陽光発電による余剰電力購入は二〇〇四年度上期(四月―九月末)で三百六十四千キロワット時と、二〇〇二年同期の約二倍。国の太陽光発電導入目標も二〇一〇年度で計四百八十二万キロワット時、二〇三〇年度では計約八千三百万キロワット時、年間約百七十四キロワットの根で取り付け、市民の意識

五年後には約千四百四十万トが変換することに意味があるのに

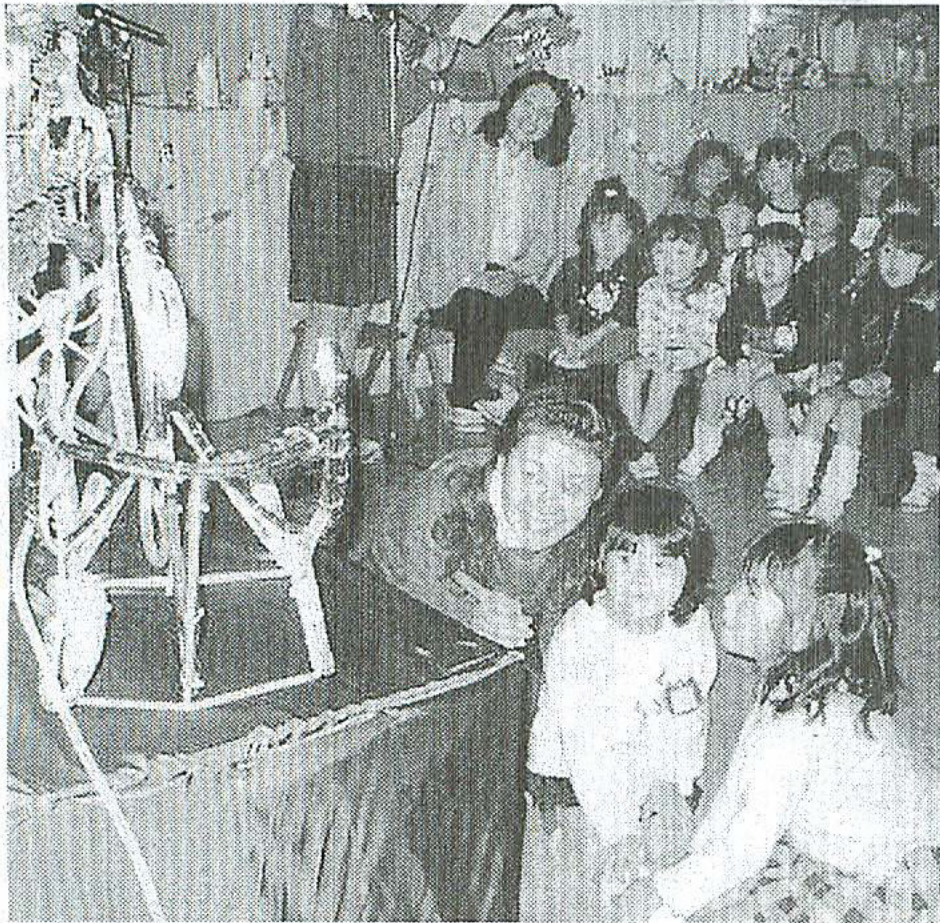
が削減できる計算になる。だが、ファンドが頼ってきたNEDOの「新・省エネルギー非営利活動促進事業」は今年度で打ち切られる。「住な仕組み作るんやろね」。国の対応を冷やかに見る竜池は「省エネ、節約。自分たちでできることをやるだけ」と言い切る。

「太陽のように明るい子どもになりますように」。ソーラーパネルには園児らの名前とともにメッセージが書き込まれ、自然エネルギーの力を目で実感できるよう、玄関に発電量を示す表示板を設置した。

「ずっとつけておきましょうね。点灯後、保育士の言葉に、園児から「もったいないやん」との声が飛び出した。

竜池は「子どもたちが、どれくらい太陽光発電を理解しているか分からない。でも幼いころから肌身で感じないと、大人になつてからは行動につながらない」と力強く話す。

太陽が照り続ける限り、得られるエネルギー。子どもたちにもその意味を伝えることは大きい。(文中敬称略、おわり)



太陽光発電の点灯式。クリスマス飾りに明かりがともると、子どもたちからは歓声が上がった(山科区の陵ヶ岡保育園で)

市民の力信じて